プレス資料

DOSSIER DE PRESSE

2020, l'année de l'impressionnisme en Normandie
Normandie Impressionniste
2020、ノルマンディーにおける印象派年
印象派の地ノルマンディー

© Eric Bénard - CRT Normandie

www.normandie-impressionniste.fr

2020 年 2 月 27 日

2020 年 6 月 12 日、6 月 22 日改訂

目次

はじめに　印象派のふるさと、ノルマンディーとパリ・イル・ド・フランス

I)　印象派、日本とフランスを結ぶ強い文化的絆

a.　印象派と日本

b.　クロード・モネと日本

c.　現代における文化的対話

II) 旅への誘い「印象派を巡る旅、幸せなひとときを探しに

III) 印象派の地ノルマンディー

a.　イベントについて

b.　日々移りゆく色

c.　主要イベント

i.　印象派関連の展覧会

1.　灼熱の都市―アート、労働、変革（カーン美術館）

2.　電燈が照らす夜（ル・アーヴル、アンドレ・マルロー近代美術館）

3.　フランソワ・ドポー、600 点の絵を収集した男（ルーアン美術館）

4.　屋外、コローからモネまで（ジヴェルニー印象派美術館）

5.　コレクションの繁栄（ジヴェルニー印象派美術館）

6.　自然のアトリエ（ジヴェルニー印象派美術館）

7.　エトルタの発明。印象派黎明期のウジェーヌ・ル・ポワトヴァンと友人たち（フェカン、ペシュリー博物館）

8.　未知の土地への旅：コタンタンのブーダン、ルノワール、シニャック…（シェルブール・アン・コタンタン）

ii.　コンテンポラリーな創作活動へのかかわり

1.　印象派ルーアン 2020

2.　光のカテドラル（ルーアン）

IV) ユーラシア旅行社による「印象派フェスティバル」特別ツアー

別添

a.　ノルマンディー印象派フェスティバル　総合ディレクター、フィリップ・ピゲ　プロフィール

b.　広報担当

はじめに

印象派のふるさと

ノルマンディーとパリ・イル・ド・フランス

当初、2020 年 4 月 3 日～9 月 6 日の会期が予定されたノルマンディー印象派フェスティバルは、新型コロナ感染症対策のため、2020 年 7 月 4 日～11 月 15 日の新しい日程で実施することを決定いたしました。なお、イベント名称は「印象派の地ノルマンディー」*Normandie Impressionniste* と変更いたします。【06.12 追記】

2020 年 7 月 4 日から 11 月 15 日まで開催される「印象派の地ノルマンディー」。初開催から 10 年目となる今年、印象派の創造活動に焦点を当てた展覧会やイベントを開催いたします。

このユニークなイベントは、印象派を巡る旅へ出発する絶好の機会になるでしょう。世界的に知られる印象派の傑作が生まれたのは、まさにノルマンディー地方、セーヌ川沿いやノルマンディーの海岸沿い、そして、近代化するパリの活気に満ちた区域においてでした。現在、そして、2020 年のフェスティバル中に、充実した展覧会に集められた傑作群を鑑賞し、画家たちがイーゼルを構えた息を飲む風景に包まれて、芸術家の魂に湧き上がった感情を体験し、彼らの住居、庭、アトリエを訪れて、彼らの魂の内奥に触れるといった、他所では得られない体験ができます。

日本からノルマンディーへ、この印象派の旅への招待は、日仏両国が 150 年の間、築き上げてきた文化交流の一つでもあります。

印象主義の名前は、1872 年にモネがル・アーヴルの港で描いた作品「印象・日の出」から来ています。美術史に足跡を残し、これからも影響を与え続ける決定的な絵画の潮流が、ノルマンディー地方や、芸術の都だったパリとその周辺で花開いたのです。「ノルマンディー」と「印象派」のつながりは、歴史的・地理的な現実としっかり呼応しています。ノルマンディーの類ない空、輝く岸辺、緑豊かな谷間が、この時の絵画によって永遠化されました。

ノルマンディーの特徴的な光は、印象派画家にとどまらず、多くのアーティストに霊感を与え、芸術史に大きな影響を残しました。

ドラクロワは子供の頃にフェカン近辺で休暇を過ごしています。クールベやモネよりも前に、彼はエトルタの絶壁を描き、「ディエップの絶壁から見た海」では、印象派から尊ばれる点描や色彩の並べおきを初めて実験しています。ミレーは、コタンタン半島北部の海沿いの村出身で、ル・アーヴルに住み、すぐ近くのノルマンディーの農村風景を絵の題材にしていました。クールベは、1840 年からノルマンディーの海岸に霊感を探し求め、ディエップに定期的に来ています。ドガは若い時からル・アラ・デュ・パンを訪れていました。彼が最初に競馬を描き始めたのも、アルジャンタン競馬場においてです。ディエップで、ルノワールは、モネ、ブランシュやピサロといった友人と出会いました。

さらに多くの絵画運動に取り組む人々が、数十年にわたりノルマンディーの自然の美しさに魅了され続けています。今日も、ノルマンディーの海沿いに近い街カーンに住むイギリス人芸術家デイヴィッド・ホックニーのように、芸術家たちを引きつけています。

I. 印象派、日本とフランスを結ぶ強い文化的絆

a. 印象派と日本

印象派*は日本とフランスに強い絆を生み出しました。その歴史は、明治時代の初め、印象派画家たちが日本の芸術に魅了されてゆく過程で両国の間に生まれた活発な文化交流の果実です。

1868 年以降、浮世絵を初めとする日本の芸術品がフランスへ容易にやってくるようになりました。印象派画家たちは、西洋の芸術とは大きく異なる、彼らの目には革新的に見えた浮世絵に夢中になりました。日本人が見せる創造の自由奔放さが、西洋の画家たちの手法に深く影響を与えます。モネ、ドガ、メアリー・カサットらは、鮮やかな色彩、遠近法の無視、単色の並べ塗り、日常生活を題材に取り入れ、自然が絵画に入り込むといった、日本芸術の多くの特徴に霊感を受けました。日本絵画が彼ら自身の絵画について深く考えさせ、当時の芸術的規範（遠近法、アトリエで題材を忠実に再現すること）に背を向けて、生活、外気、瞬間を祝福する絵画を誕生させました。

**ここで、印象派は、広い意味での遺産を残したパイオニアと考えられます。*

クロード・モネ　ラ・ジャポネーズ
ボストン美術館所蔵
Claude Monet, La Japonaise, Musée des Beaux-Arts, Boston

メアリー・カサット　湯浴み
ワシントン・ナショナル・ギャラリー所蔵
Mary Cassatt, The Bath, National Gallery of Art, Washington DC

ヴァン・ゴッホ　タンギー爺さん　ロダン美術館所蔵
Vincent Van Gogh, Le père Tanguy, Musée Rodin

b. クロード・モネと日本

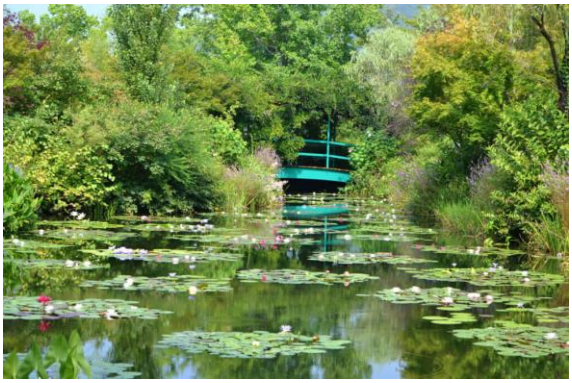
クロード・モネは、日本の浮世絵に最初に興味を示した画家の一人です。多数の版画を収集し、今でも、彼のジヴェルニーの家の壁に飾られています。北斎、広重、歌磨らの二百作品以上が画家を取り囲み、睡蓮の連作を始めとする彼の芸術活動に長く影響を続けたと思われます。

クロード・モネ　睡蓮の池、緑のハーモニー　Photo © RMN

歌川広重　名所江戸百景 亀戸天神境内
© Met Museum, NYC.

モネが日本に抱いていた崇拝の念は、ジヴェルニーの庭にも表れています。水、竹、柳などを庭に配置するのに、日本の庭園技術を参考にしています。彼の広大な池にかかる緑の橋を見れば、浮世絵に描かれた橋を見たことは明らかです。

ジヴェルニーのモネの庭園にある日本風の橋
© Fondation-Claude-Monet,-Giverny Fondation Claude Monet, Giverny – droits réservés



北川村にあるモネの水の庭
Jardin d'eau de Monet - village de Kitagawa

オランジュリー美術館（パリ）の睡蓮の間をモデルにした地中美術館（直島）のモネの間や、日本でジヴェルニーの庭のレプリカを作った北川村のモネの水の庭のように、150 年以上の時を隔てても、印象派の絆がフランスと日本をつないでいます。

パリ、オランジュリー美術館の睡蓮の間
Salle des Nymphéas, Musée de l'Orangerie, Paris

直島、地中美術館のモネの間
Salle Monet - Chichu Art Museum - Naoshima

c. 現代における文化的対話

今も芸術面での交流が続いているのは平松礼二の作品を見ても明瞭です。1941 年東京生まれの画家は、1994 年に初めてパリを訪れ、オランジュリー美術館で睡蓮の絵を目にしました。 彼は、その時、日本の装飾画の前に立っているような感覚に襲われます。ジヴェルニーに感動し、長期滞在しながら、睡蓮の池をスケッチし続けました。

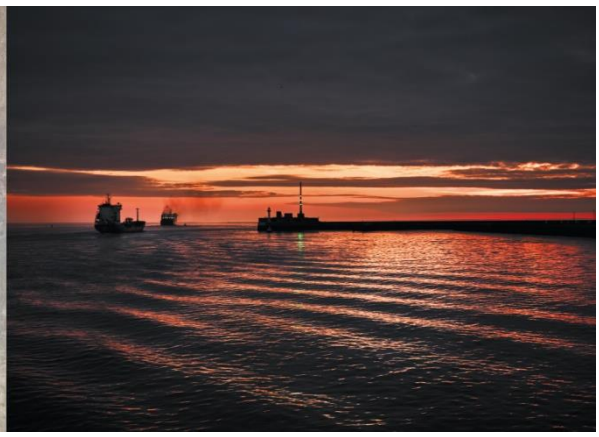
モネと同じ技法を使うわけではありませんが、平松は同様に自然の儚い変化や移ろいを捉え、光が果てしなく反射する水面に映る睡蓮や柳という、モネと同じ題材を表現しようとします。

2013 年、ノルマンディー印象派フェスティバルで、彼の作品はジヴェルニー印象派美術館で、モネが収集した日本の浮世絵と並べて展示されました。

平松礼二　ジヴェルニー・モネの池・風音　ジヴェルニー印象派美術館所蔵
Hiramatsu Reji, Giverny, L'étang de Monet, brise légère, Musée des Impressionnismes de Giverny

別の領域では、2018 年の夏、日本人カメラマンの小川康博が、パリ・イル・ド・フランスとノルマンディー地方観光局に招かれて、印象派体験をしました。パリ周辺とノルマンディーを巡り、モネ、ルノワール、シスレー、カイユボット、ブーダン、ミレー、ゴッホといった画家の名作が生まれた 12 か所を訪れました。この旅でインスピレーションを受けて、光、風景の美しさ、生きる喜びが溢れる官能的写真を撮影しました。

霊感に満ちた彼の写真は、画家たちがキャンバスの上に具現化した幸福の時間を、現在の視点で表現しています。



「パリ地方とノルマンディー 印象派を巡る旅　小川康博、 2018 年夏」展より
＃幸せなひととき　ル・アーヴル、ノルマンディー地方
（左）クロード・モネ、「印象、日の出」1872 年、マルモッタン・モネ美術館、パリ© Christian Baraja
（右）© Paris Regon Tourist Board / Yasuhiro Ogawa

II.旅への誘い「印象派を巡る旅、幸せなひとときを探しに」

ノルマンディー地方とパリ地方へようこそ！ 世界広しといえどもこの二つの地方ほど、印象派絵画の傑作を鑑賞し、当地にインスピレーションを掻き立てられた印象派の画家たちの感動をつかのま追体験できる場所はありません。ノルマンディー地方、そしてパリ地方で芸術史に革命をもたらした絵画運動、「印象派」が生まれ、発展しました。自然と近代性を追求した印象派の画家たちは、森で、庭で、セーヌ川やオワーズ川のほとりで、ノルマンディーの海岸で、そしてモダニティの熱気あふれるパリの街角でイーゼルを構えました。それらの風景のほとんどが今なお手つかずのまま残っており、ドービニー、ブーダン、モネ、ルノワール、ドガ、モリゾ、ピサロ、カイユボット、シスレー、ゴッホ、リュスなど印象派の巨匠と、彼らの先駆者や後継者の足跡をとどめています。

今、ノルマンディー地方とパリ地方は印象派の旅を通じて、まぎれもない幸せなひとときを提案しています。

たとえば…

ノルマンディーの海辺で光と空の移ろいを味わい、美しい庭で気分をリフレッシュする、

モンマルトルをはじめパリのあちこちで、芸術の熱気とボヘミアン文化の真髄に触れる、

家族で草上のピクニックを楽しんだり、オワーズ川のほとりやセーヌ川沿いの野 外レストランで仲間とグラスを交わしたりして、大切な人と過ごす時間をゆったり楽しみ、生きる喜びを実感する美術館が所蔵する芸術作品に感動し、画家のプライベートな空間に身を置き、彼らの庭やアトリエ兼住居でセルフポートレートを撮影する… 印象派の旅は、数え切れないほどたくさんの幸せのひとときに満ちています。 そんなひとときを、さあ、今度はあなたが体験する番です！

2020 年は、ノルマンディー地方を訪れ、印象派の至宝と体験を発見するのにふさわしい特別な年といえます。ノルマンディー印象派フェスティバルでは、印象主義の傑作を鑑賞するだけでなく、それらの絵が製作された場所そのものを訪れる貴重な機会が得られます。

III.　印象派の地ノルマンディー

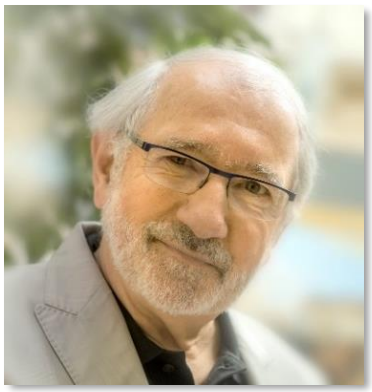
a. 印象派の地ノルマンディー

芸術史で最も重要な潮流のひとつ、印象派をテーマに一大イベントを開催するというアイデアが、2010 年にノルマンディーで生まれました。2010 年、2013 年、2016 年と、回を重ねるうちにフランスの重要なアート・イベントのひとつになったノルマンディー印象派フェスティバル（2020 年はイベント名称を「印象派の地ノルマンディー」に変更）は、今日、印象派の創造活動に焦点を当てて多分野にわたって企画されるイベントとなっています。

2020 年で第 4 回となり、エリク・オルセナが代表を務めるこのイベントは、その１０年の歩みを記念し、フィリップ・ピゲ総合ディレクターが考案した新しい方式での試みとなります。2020 年は、全イベントを単一のテーマで構成するのではなくて、「日々移りゆく色」という、豊かで解釈の余地を含む多面的なテーマを中核とすることです。印象派の画家たちは、まさに絵画の革命となる色彩のプリズムを通して、彼らの日常と、当時の社会の変化を映し出す題材を描きました。産業革命が起こり、社会、経済、都市に影響がもたらされ、それによって新しい社会階層と、これまでにない行動様式（休暇、収集など）が花開いていったのです。

人々の物の見方や世界観を大きく変えた芸術運動という視点から、第 4 回イベントは、この芸術運動の同時代性を気づかせると同時に、その時代に浸りきることのできるイベントを目指しています。

b. 日々移りゆく色



総合ディレクター、フィリッピ・ピゲにとって、19 世紀後半にヨーロッパで起こった産業革命と、それがもたらした大変動は、印象主義という近代で最初の革命的絵画運動と切っても切れない関係にあります。1874 年、絵画・彫刻サロン（当時の美術アカデミーによって公式に認められた作品のための展覧会）に展示を断られ続けていた 30 名ほどの芸術家たちが互いに助け合って組織的にまとまり、何らの後援を受けずに独立して作品を発表することにしました。1886 年まで彼らが開催した 8 回の展覧会は、芸術界において、その歴史を根底から覆しました。

印象派の画家たちが共通して追い求めたのは、家族、余暇、仕事、新産業、社会の変貌など、刻一刻と変わる生活を、その当時まで実践されていたアカデミックな規範から完全に脱して表現できる絵画です。純粋に抽象的な美学のために、彼らが色彩に施した処理は、少しずつ題材の束縛から離れて、ついに消えてしまうまでになりました。

第 4 回目となるこのイベントは、この芸術運動を再考し、美しい風景の牧歌的でさえある「紋切り型」表現にとどまらない、まさに「時代の証人」であることを証明します。

というのも、印象派の画家たちが懸命に実践したことは、彼らが感じたことを最も正しい方法で表現することであり、感性と知性とに同時に訴えかける知覚の反響として世界を絵画にすることでした。そこで、彼らは人生と人間が置かれた状況から新しいテーマを見出しました。

最も広い意味での風景が、印象派の DNA であり、画家たちの世界観に枠組みを与えるきっかけだった一方で、彼らは自然や都市で、また職場や余暇において見られる、あらゆる社会的変化を注意深く見守りました。こうして、彼らの芸術領域を充実させる革新的なモデルと作業手順を取り入れながら、その当時の一潮流を形成したのです。「印象派の地ノルマンディー」は、このような実際の創作につながる推進力の意味深さに光を当てます。「日々移ろう色」という中心テーマに沿いながら、ノルマンディー地方の全域にわたって公的機関、協会、私的団体等によって実施される展覧会、イベント、アクティビティなど、多分野を統括する委員会によってこの文化イベントは企画・運営されます。

c. 主要イベント

*は変更後の日程

i. 印象派関連の展覧会

Les villes ardentes – Musée des Beaux-arts de Caen
灼熱の都市 7 月 11 日～11 月 22 日* カーン美術館

フェルディナン・ジョゼフ・ゲルドリ、ルーベでの羊毛選別の場、1910 年頃 Ferdinand Joseph Gueldry, scène de triage de la laine à Roubaix, vers 1910 ©Musée La Piscine / Alain Leprince Roubaix

「灼熱の都市」展では、1870 年から第一次世界大戦の前夜まで、産業化されたフランスが勃興する時代を映し出す、およそ 100 点の絵画やデッサンを一堂に集めます。印象派画家たちは、産業地区に新しい風景を見ました。波止場や工事中の町々の光景は、カミーユ・ピサロ、アレクサンドル・スタンラン、マクシミリアン・リュスらを魅了しました。画家たちは、女性労働者の増加や労働者階級の出現など、社会の変革を目撃しました。風景と変貌する社会現実に向き合い、美と新しい活力を見出しました。

www.mba.caen.fr

Nuits électriques - Muma le Havre

「電燈が照らす夜」 7 月 3 日～11 月 1 日* アンドレ･マルロー近代美術館（於ル･アーヴル）

マキシム･モフラ、夜の幻想－1900 年万国博覧会、ランス美術館所蔵　Maxime MAUFRA (1861-1918), Féérie nocturne - Exposition Universelle 1900, 1900, huile sur toile, 65,9 x 80,8 cm, Reims, Musée des Beaux-Arts © C. Devleeschauwer

1879 年にトーマス・エジソンが発明した白熱灯は、照明の歴史にとって画期的でした。1880 年代後半から 1920 年代にかけて、ヨーロッパ・アメリカ大陸では、進歩・エネルギー・生命力の代名詞になった、この「電気の妖精」に夢中になりました。町々では、まず歩道で、次に大通りで無数の街灯が照らされ、やがて、建物も百貨店も劇場やカフェのテラスも電灯に照らされました。

当展覧会は、絵画、デッサン、版画、写真、映画など、ヨーロッパの公的機関や個人コレクションから集められた１５０近くの作品を展示します。有名画家（ピサロ、リュス、スタンラン、ボナール、ムンク、キース・ヴァン・ドンゲン、ソニア・ドロネーなど）の作品が展示されます。**www.muma-lehavre.fr/**

François Depeaux l'homme aux 600 tableaux - Musée des Beaux-Arts de Rouen

「フランソワ･ドポー、600 点の絵を収集した男」 7 月 11 日～11 月 15 日*　ルーアン美術館

ピエール＝オーギュスト･ルノワール、夏 En été *ou* Lise, Pierre-Auguste Renoir © BPK, Berlin, Dist.RMN-Grand Palais, Jörg P. Anders

600 点の絵を収集するほど先見性のあったフランソワ・ドポーは、全時代を通じて印象派絵画の最も大きなコレクションのひとつを築き上げました。

友人の画家たちを常に支援し続けながら、印象派をその初めから開花までを支え、 1909 年にはノルマンディーでも他にないほどのコレクションをルーアン市に寄付するなど、印象派の作品が公的機関のコレクションに加えられる道を開きました。この 50 点の油絵を含む寄付が行われた時期に、彼の頂点と失墜が現れます。波乱に満ちた離婚によって傷つき閉じこもるようになったドポーは、第一次世界大戦でさらに悪い方向に向かいます。.

この斬新な展覧会は、この大胆で、かつ思慮深い収集家であった実業家の芸術的、経済的、人間的な冒険を再現するものです。有名美術館から例外的に貸し出してもらうだけでなく、地域の個人蒐集家の協力を仰ぎ、今では世界中に散らばってしまった彼の収集作品によって、ある夏の時間を再現します。

www.mbarouen.fr

Plein air De Corot à Monet au Musée des Impressionnismes à Giverny
「屋外、コローからモネまで」 ~~3 月 28 日～6 月 28 日~~ ジヴェルニー印象派美術館

＊予定会期後の展示作品の調達がつかずやむなく中止。展示内容は Google Arts & Culture にてオンライン鑑賞が可能。オーディオガイドは YouTube で提供。

クロード・モネ、トゥルーヴィルの浜辺
Sur la plage à Trouville, Claude Monet ©J Paul Getty Museum, Los Angeles

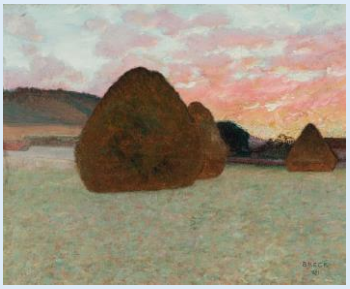
屋外での絵画製作は、印象派と彼らの初期の批評家たちが提唱したとされていますが、1870 年代になって初めて実践されたわけではありません。むしろ、風景画が一つのジャンルとして認識される長いプロセスの到達点です。18 世紀からフランスでは、画家たちは光を観察し、その効果を客観的に把握するように努めていました。ドガ、ターナー、コロー、マネ、ブーダン、シニョリーニ、デ・ニッティス、アッバーティ、ヴァランシエンヌ、その他の代表的画家の作品 100 点以上を集める印象派美術館の展示では、屋外絵画の歴史をたどっていきます。

Reflets d'une collection - Musée des Impressionnismes à Giverny
「コレクションの反映」ジヴェルニー印象派美術館 6 月 15 日～8 月 30 日

ウージェーヌ・ブーダン、ドーヴィル・波止場
Eugène Boudin, *Deauville, le bassin,* 1884, Giverny, musée des impressionnismes © Giverny, musée des impressionnismes / photo : Jean-Charles Louiset

この夏、ジヴェルニー印象派美術館では常設コレクションを美術館の展示スペース全体を使いご覧いただきます。ギュスターヴ・カイユボットによる印象派からピエール・ボナールの後期印象派まで、また印象派の影響を受けた抽象表現の画家ジョアン・ミッチェルや、繊細な詩情溢れる日本画家 平松礼二の作品まで、約 80 点を展示します。デッサン、絵画、写真、彫刻、はたまた手紙まで多岐にわたる作品をお楽しみください。

L'Atelier de la nature, 1860-1910. Invitation à la Collection Terra - Musée des Impressionnismes à Giverny
「自然のアトリエ、1860-1910 テラ・コレクションへの招待」 ジヴェルニー印象派美術館 9 月 12 日～1 月 3 日



ジョン・レスリー・ブレック、秋の日の習作
John Leslie Breck, *Études d'un jour d'automne, nº 2,* 1891, Chicago, Terra Foundation for American Art
© Terra Foundation for American Art, Chicago

19 世紀後半、多くのアメリカ人画家が印象派に魅せられてジヴェルニーに移住し、その技法を獲得しました。屋外に出て、より鮮烈な色彩と自由な筆致を大事にするようになります。当展覧会ではアメリカ出身の印象派画家から見た風景画の歴史について辿ります。テラ・アメリカンアート財団、オルセー美術館、オランジュリー美術館、フランス国立図書館の協力により実現する企画展です。

www.mdig.fr/

L'invention d'Étretat Eugène Le Poittevin et ses amis à l'aube de l'impressionnisme - Musée des Pêcheries à Fécamp

「エトルタの発明。印象派黎明期のウジェーヌ・ル・ポワトヴァンと友人たち」

2020 年 7 月 14 日～11 月 15 日*　ペシュリー博物館（於フェカン）

ウジェーヌ・ポワトゥヴァン、エトルタの漁師
Pêcheurs à Etretat, Eugène le Poittevin
© Cliché Philippe Louzon

当展覧会は、ウジェーヌ・ル・ポワトヴァンがエトルタに多くの芸術家の仲間たちを集めて、19 世紀半から 25 年ほどの間に屋外で絵画を製作する中心地としてのエトルタを「発明」することに、どのように貢献したかを検証します。イザベイからクールベまで、集められた作品によって、印象派運動へとつながる、そして次世代において重要となる過程を段階ごとに見られます。

Voyages en terre inconnue : Boudin, Renoir, Signac en Cotentin - Au Musée Thomas Henry, Cherbourg-en-Cotentin

「未知の土地への旅：コタンタンのブーダン、ルノワール、シニャック…」

2020 年 9 月～2021 年 1 月*　トマ・アンリ美術館（於シェルブール・アン・コタンタン）

ポール・シニャック、ガットヴィル灯台　Le phare de Gatteville, Paul Signac, vers 1934, huile sur Carton © Musée Thomas Henry

発展の真っただ中にあった産業都市シェルブールは、19 世紀に多くの労働者で溢れかえります。ノルマンディー地方の他都市と同様に、シェルブールは 1828 年、海水浴のブームに沸き、1864 年にカジノが建設されます。1858 年にはシェルブールとパリを結ぶ鉄道が開業しています。

前衛的といえる一握りの芸術家たちがイーゼルを携えて、この地方にやってきました。ベルト・モリゾ、オーギュスト・ルノワール、ウジェーヌ・ブーダン、ポール・シニャック、アルベール・マルケ、アンリ・マティスら。当展覧会は、当時の生活状況と、この地で製作された作品を通して、コタンタンでの画家たちの滞在の様子をつぶさに見ていきます。

ii. コンテンポラリーな創作活動へのかかわり

Rouen Impressionnée 2020
印象派ルーアン 2020
2020 年 6 月 23 日～11 月 15 日*

ガスパール・リエブのストリートアート
Gaspard Lieb © Jean-Pierre Sageot

2010 年から、ノルマンディー印象派フェスティバル期間中、ルーアン市は公共空間で展覧会を企画しています。現代芸術の創造を間近に見る機会で、その一部は常設化されることで、地区の景色と遺産の一部となります。

ストリートアートは 2020 年の新テーマです。およそ 20 の新しい芸術作品が、グラモン、サン・セヴェールといった地区に設置、屋外展示されます。

巨大になることが多い壁画だけでなく、ストリートアートのテクニックは、その幅を大きく広げています（コラージュ、チョーク、版画、ハプニング、インスタレーションなど）。この発展中のアートの豊かさを多くの人々が知ることができます。

Cathédrale de lumière – Tous les soirs – Rouen
光のカテドラル　毎夜　（於ルーアン）
2020 年 7 月 4 日～9 月 30 日

光のカテドラル　Cathédrale de lumière © La CREA

毎晩、夜の帳が下りると、ルーアン大聖堂前面に照明が当てられ、大規模なショーが行われます。このプロジェクト・マッピングでは、小舟、睡蓮、ジヴェルニーの橋、当時の画家たちに愛された絶壁に迫る海の怒涛など、印象派の世界に浸ることができます。大聖堂は、闇から光へと、透明だと思ったら色とりどりだったりする水の反射の中に溶けていきます。そして、急に活気を帯び、それぞれの絵に新しい印象を与えます。フィナーレには、この歴史的建築物が様々な色の葉や子供たちによって色付けられた大聖堂のデッサンに覆われ、まるで色鮮やかで幻想的な花火をみるようです。

今年は大聖堂を正面から見渡せる Webcam が設置されます。遠くにいても 24 時間じゅう、平日も休日も現在の姿をカメラで見ることができるのです。モネを魅了し連作「ルーアン大聖堂」を描くに至った、日々の中の光の移ろい方を体験することができます。【6.22 追加】

IV. ユーラシア旅行社による「印象派フェスティバル」特別ツアー

このプレス資料に目を通せば、ノルマンディー地方で印象派をめぐる旅を組み込むのに、2020 年が特別な年であることを理解されることでしょう。

印象派の作品がノルマンディー地方全域にわたって高い密度で展示されることから、ノルマンディー地方観光局は、日本人旅行者に最高の環境でノルマンディー印象派フェスティバルを訪れるという提案をいたします。

ノルマンディー地方観光局は、ユーラシア旅行社に、印象派というテーマを注意深く吟味検討してもらいました。

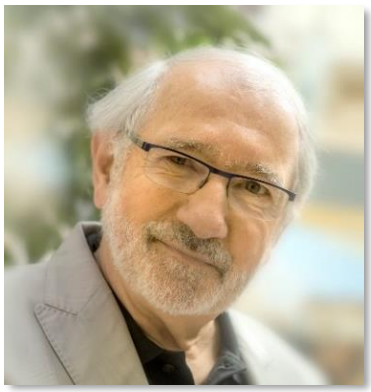
ノルマンディー側の情報提供を利用して、ユーラシア旅行社は、これまでの枠から抜けた新しいスタイルの滞在を考案する努力をされました。その結果、ユーラシア旅行社は、ノルマンディー印象派展にあわせたユニークな旅と経験を商品化いたしました。

３つのツアーの出発が 2020 年に予定されています（5 月 18 日、6 月 29 日、9 月 7 日）。このツアーは、「印象派の地ノルマンディー」開催中に、ノルマンディー地方を訪れ、７泊８日の滞在中に３つの展覧会をご覧いただきます。

https://www.eurasia.co.jp/travel/tour/WFN8?direction=1

別添

a. 印象派の地ノルマンディー　総合ディレクター
フィリップ・ピゲ　プロフィール



フィリップ・ピゲ Philippe Piguet、1946 年生まれ、芸術史研究家、教師、芸術批評家。クロード・モネの義理のひ孫。

美術批評家であり、展覧会では独立した立場でディレクターを務めるフィリップ・ピゲは、1985 年から「L'Oeil ルイユ」誌、2002 年以来「Art Absolument アール・アプソリュマン」誌に定期的に寄稿。2010 年 3 月からコンテンポラリー・デッサン展覧会「DRAWING NOWIPARIS ドローイング・ナゥ　パリス」芸術監督に就任。

数多くの美術カタログを執筆。1986 年から ICART (アートキャリア上級学院)で芸術史を担当、活発に講義を行う。

「モネとヴェニス（Monet et Venise）」 (Herscher 社、1986 年刊、2008 年秋再版)、「フランスにおける現代アート探訪の旅ガイド Guide des Lieux de l'Art Contemporain en France 」(Adam Biro 社、1998)等を出版。ドキュメンタリー映画「誰が何を発注するか？フランスにおける 20 年の公募 Qui commande quoi ? Vingt ans de commande publique en France」(Terra Luna Films 社、2001)、「アート・ディーラー、エルンスト・バイエラーMarchand d'art, Ernst Beyeler」（BixFilms/Freihändler Filmproduktion、 2007）、「ジヴェルニーのクロード・モネ、アリスの家。Claude Monet à Giverny La maison d'Alice」(BixFilms/France Télévisions、2010)を製作。

出典: 現代アート財団（Fondation pour l'Art Contemporain） - クロディンヌ＆ジャン＝マルク・サロモン、ベラン出版 (Claudine et Jean-Marc Salomon et Belin Editeur)

b. 広報担当

Comité Régional de Tourisme de Normandie
ノルマンディー地方観光局
Sabine PANNIER　サビーヌ･パニエ
Marketing manager, Marchés Asie
マーケティングマネージャー（アジア担当）
Tel　+33 (0)2 32 33 67 68
s.pannier@normandie-tourisme.fr
normandie-tourisme.fr
pronormandietourisme.fr

Atout France
フランス観光開発機構
Mayumi MASUDA　増田真由美
Attachée de Presse　広報担当
Tel　+81 3-5798-6297
mayumi.masuda@atout-france.fr
jp.france.fr/ja
jp.media.france.fr/